## 関連文化財群３：石灰石がつくりだした歴史文化
## ―日本の近代化とインフラを支える津久見の石灰･セメント鉱業―

【概要】

本市は、良質で豊富な石灰石と、鉱山から海までが近く、リアス海岸という地理的条件を活用し、江戸時代から石灰・セメント鉱業により発展してきた。こうした石灰石産業は、本市の経済だけでなく、現在もなお日本のインフラを支えている。

本市は、国内屈指の良質な石灰石の産地として知られ、年間約 2,500 万 t の石灰石を採掘し、その生産量は日本一を誇る。さらに、40 億 t の石灰石が埋蔵されているといわれる。

石灰岩は、主に炭酸カルシウム（$CaCO_3$）でできた岩石である。大昔の $CaCO_3$ の殻を持つサンゴや貝類が何億年もの時間をかけて積み重なってでき、大きな地殻変動によって隆起してできたのが石灰岩の山である。

本市では、海岸（水晶山採掘跡地）から胡麻柄山、碁盤ケ岳方面にかけて石灰岩でできた山が連なり、さらにその鉱脈は豊後大野市方面へと続く。

胡麻柄山一帯での石灰石の採掘は江戸時代後半の寛政３年（1791）から始まった。臼杵城下畳屋町の吉田屋八十治が小園村で石灰焼きを始めたのが「津久見石灰」の最初である。寛政 10 年（1798）に「領内の石灰の出来がよく、この頃大坂方面でも好評。」（「古史捷」臼杵藩史料）といわれるほど流通価値を持つ商品として取り扱われた。文久２年（1862）に藩が専売品に指定、翌３年（1863）に徳浦に石灰役所を設置するなど生産を本格化させた。

そうした中、明治３年（1870）１月に起こった大火災により、当時の石灰産地の中心であった青江地域の蔵富から青江川下流の七か村が全焼、石灰焼窯も四か所が焼失するなど、壊滅的な被害を受け、生産量が大幅に落ち込んだ。その後、石灰の生産は徐々に回復し、生産の中心は青江川下流域や水晶山を挟んだ徳浦に移っていった。

わが国のセメント鉱業は､明治６年（1873)､政府によって東京深川に摂綿篤（せめんと）製造所が創設され、同８年（1875）最初のセメントを製造したことに始まり、日本の近代化が進むとともに全国各地にセメント工場が建設されていった。

明治に入るとわが国は、急速に近代化を進めていった。セメント鉱業はそうした時期、建築や土木分野等インフラの整備のため、その需要が増し、急速に発展していった。

明治 10 年（1877）の内国勧業博覧会を契機に、大分県が多種多様な地下資源に恵まれていることが知られるようになると、経済的に成り立つ鉱山の一つとして、石灰石を焼いて作る石灰が見直され、石灰の需要が伸びていった。

本市でも、明治 40 年（1907）代以降、石灰産業が活気をおびてくるようになる中、豊富な石灰石と恵まれた港湾、鉄道の開通（大正５年（1916）日豊線臼杵―佐伯間）等が重なり、これ以降セメント工場の進出が相継いだ。これを契機として「石灰とセメント」のまち形成へと進むことになる。

大正６年（1917)、徳浦で桜セメント株式会社九州工場が操業を開始した。これが津久見でのセメント製造の始まりである。以後、大分セメント株式会社、太平セメント株式会社とセメント

会社が進出し、昭和 13 年（1938）小野田セメント株式会社、平成 6 年（1994）秩父小野田株式会社、平成 10 年（1998）太平洋セメント株式会社と名前を変えながら続き、今日に至っている。

こうした石灰石産業がこの地に発展してきた理由としては、「豊富な石灰石」、「鉱山から海までの近さ」という好条件に加えて、津久見湾はリアス海岸で大型船が利用しやすく、産業に適していることが挙げられる。

本市には、戦前まで石灰石を焼くための土中窯（どちゅうがま）（徳利型の窯、石灰石と無煙炭を交互に入れ焼成する。）が数多く残っていたが、設備の大型化、機械化に伴い戦後、次々に姿を消していった。一方で伝統的製法による漆喰の品質が評価され、姫路城（兵庫県姫路市）や大浦天主堂（長崎県長崎市）、首里城（沖縄県那覇市）といったわが国でも代表的な文化財の補修にも使われるようになった。

現在の私たちの生活の中でも身近なところで、石灰石を材料とした製品が多く使われていることが分かる。その用途を見てみるとセメント、鉄鋼、建築材料、石灰、ガラス等多岐にわたっている。

現在は、胡麻柄山や碁盤ケ岳の採石場から工場へと石灰石を運ぶためのベルトコンベアを被う大きなパイプが道路を横切り、千怒地区に三和土を使ったみかん小屋（蔵）、上青江の長野や蔵富、津久見地区中ノ内等に漆喰壁の家屋や倉庫が点在する。その他、セメント工場内を走る市道徳浦松崎線や各地区から見た工場夜景等、津久見ならではの産業景観・文化的景観を見せる。

全国的にも珍しい町名として知られる「セメント町」（昭和 42 年（1967）４月新住居表示による）は、大正時代のセメント工場の進出により、警固屋から松崎一帯（下青江）が賑わっていたことから付けられた名前で、わが国の近代化を支えた津久見の石灰・セメント鉱業の歴史を地名に残し、今に伝えている。

このように、良質で豊富な石灰石と、鉱山から海までが近いリアス海岸という地理的条件を活用し、江戸時代から続く先人たちの試行錯誤と努力によって成し遂げられた石灰・セメント鉱業の隆盛は、本市の経済と日本のインフラを支えている。

千怒崎から見た津久見港

青江から見た産業景観

（上青江畑方面から見た）
津久見の石灰石鉱山（遠景）

（入船方面から見た）
津久見の石灰石鉱山

石灰焼き始祖の眞關玄如首座之像
と顕彰碑（門前町）

石灰石を利用した案内板
（市役所玄関前）

石灰乾燥棚
（白石工業株式会社津久見工場）

土中窯（株式会社丸京石灰）

町を横切るパイプ
（ベルトコンベア）（岡町）

水晶山跡地を走る
市道道籠合ノ元線

セメント工場内を走る
市道徳浦松崎線

津久見市民会館から見た
工場夜景

堅浦から見た工場夜景

青江地域の白壁の土蔵が
点在する地域（上青江川内）

セメント町通りの景観

新道壽碑
石灰石運搬道路開通記念
（入船西町）

構成文化財一覧

| 番号 | 名称 | 類型 | 指定等 |
|---|---|---|---|
| 1 | 石灰乾燥棚（白石工業株式会社津久見工場） | 有形文化財（建造物） | 未指定 |
| 2 | 土中窯（株式会社丸京石灰） | 有形文化財（建造物） | 未指定 |
| 3 | 臼杵領内沿岸図 | 有形文化財（美術工芸品（歴史資料）） | 市指定 |
| 4 | 新道壽碑　石灰石運搬道路開通記念 | 有形文化財（石造物） | 未指定 |
| 5 | 石灰焼き始祖の眞關玄如首座之像と顕彰碑 | 有形文化財（石造物） | 未指定 |
| 6 | 石灰石を利用した案内板（市役所玄関前） | 有形文化財（石造物） | 未指定 |
| 7 | 水晶山トンネル上の石灰窯跡 | 記念物（遺跡） | 未指定 |
| 8 | 八戸ドロマイト採石場跡 | 記念物（遺跡） | 未指定 |
| 9 | 門前遺跡 | 記念物（遺跡） | 未指定 |
| 10 | 伊崎役所跡 | 記念物（遺跡） | 未指定 |
| 11 | 警固屋木場役所跡 | 記念物（遺跡） | 未指定 |

| 番号 | 名称 | 類型 | 指定等 |
|---|---|---|---|
| 12 | 水晶山跡地 | 文化的景観 | 未指定 |
| 13 | 津久見の石灰石鉱山 | 文化的景観 | 未指定 |
| 14 | 青江から見た産業景観 | 文化的景観 | 未指定 |
| 15 | 津久見市民会館から見た工場夜景 | 文化的景観 | 未指定 |
| 16 | 堅浦から見た工場夜景 | 文化的景観 | 未指定 |
| 17 | 千怒崎から見た津久見港 | 文化的景観 | 未指定 |
| 18 | 青江地域の白壁の土蔵が点在する地域 | 文化的景観 | 未指定 |
| 19 | セメント工場内を走る市道徳浦松崎線 | 文化的景観 | 未指定 |
| 20 | 町を横切るパイプ（ベルトコンベア） | 文化的景観 | 未指定 |
| 21 | 水晶山跡地を走る市道道籠合ノ元線 | 文化的景観 | 未指定 |
| 22 | セメント町通りの景観 | 文化的景観 | 未指定 |

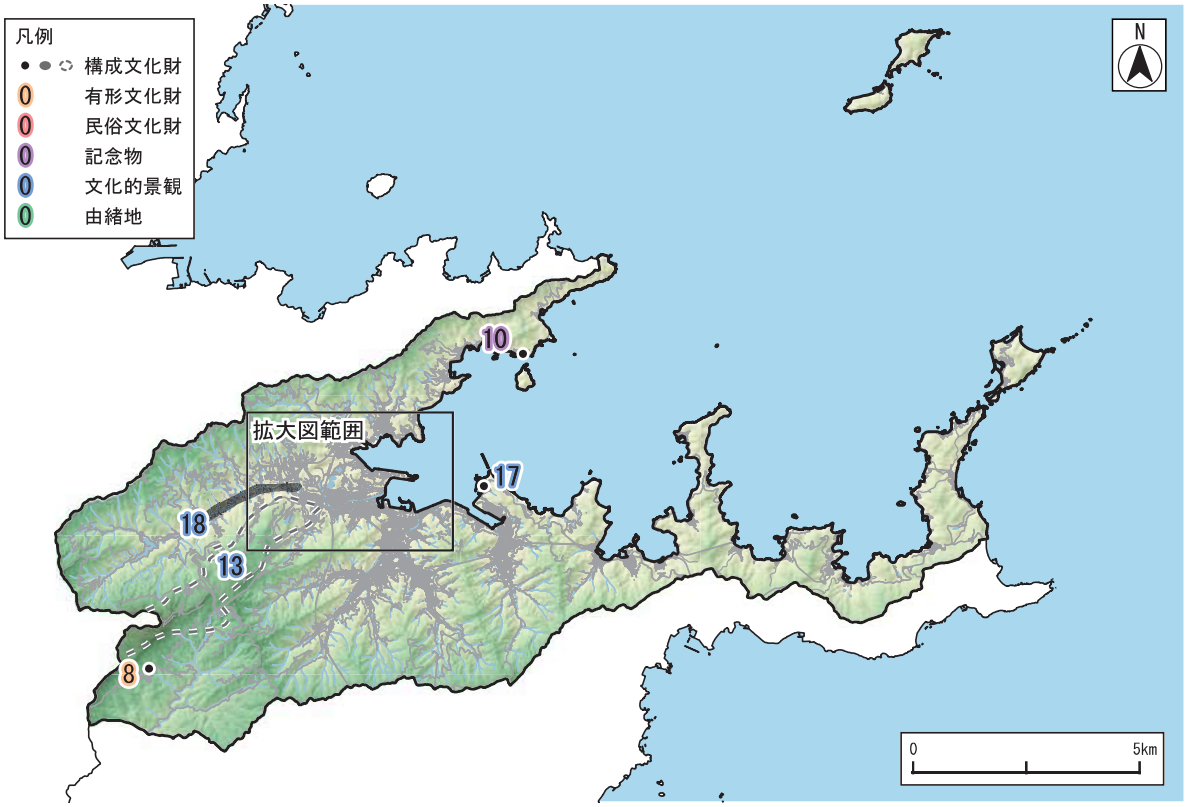


図 29　関連文化財群３の構成文化財分布図

※塗りつぶしは、18　青江地域の白壁の土蔵が点在する地域の分布範囲

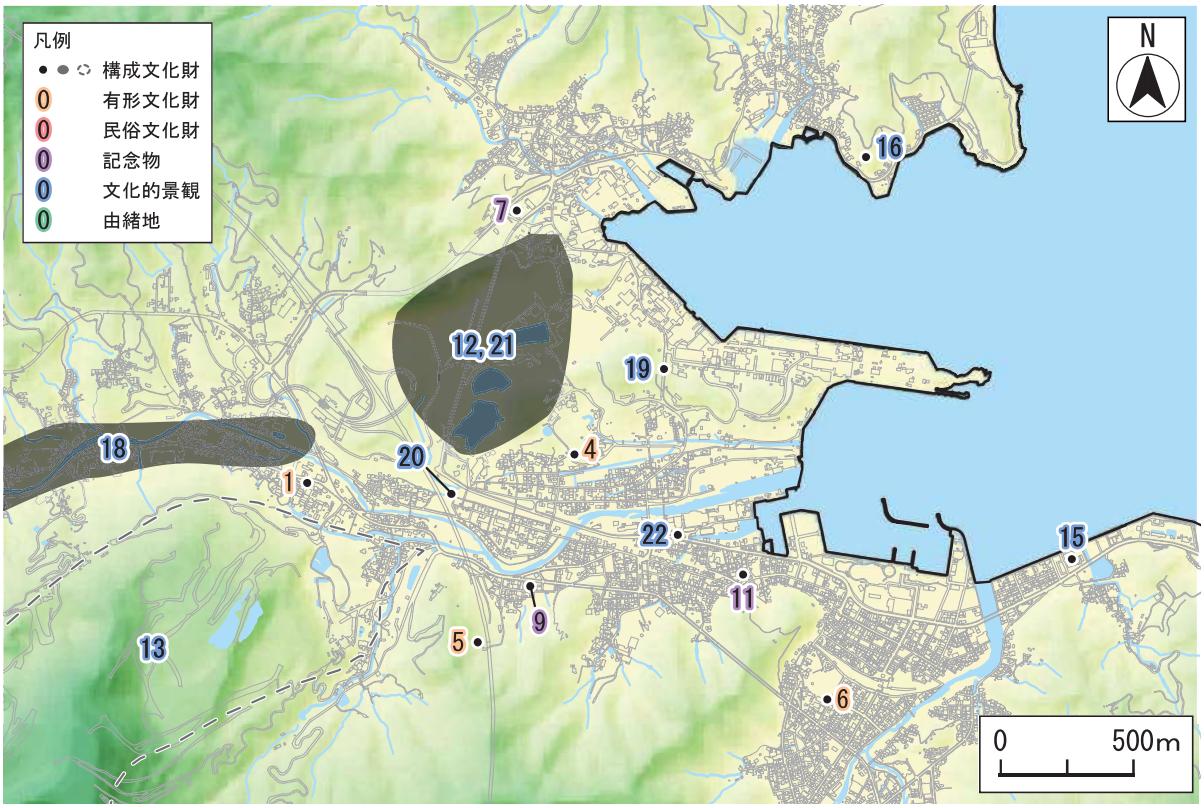


図 30　関連文化財群３の構成文化財分布図（拡大版）

※塗りつぶしは、18　青江地域の白壁の土蔵が点在する地域の分布範囲、12・21　水晶山跡地の範囲